

《資料紹介》熊本博物館収蔵品

かばばんじょう

樺番城窯跡出土品について

－資料の現状把握と今後の展望－

下高 大輔
鬼塚 勇斗¹

はじめに－本稿の目的

樺番城窯跡出土品は当館で収蔵する考古資料の中で、寄託品である三島格コレクションと呼ばれる資料群の一部である。窯跡は、熊本県荒尾市大字樺字下横打と字番城に所在し、後述する既往の研究において中世前期、特に13世紀に操業していたと考えられている。出土遺物はすべて破片で、概ね32×42 cm・深さ9 cmの当館で標準的に利用している遺物収蔵コンテナに令和4年度現在31箱で収蔵されている。これらのコンテナには複数のラベルが張り付けてあり、窯跡名称が過去に「樺」・「椀」、「番丈」・「万丈」・「万城」などの漢字が当てられていたことがわかる。後述する美濃口雅朗による整理報告で、字図表記に従った「樺番城」とされ(美濃口1997)、現在この表記が当館での正式な登録資料名となっている。

令和4(2022)年度、本資料は特別利用(資料閲覧・写真撮影等)がそれ以前に比べると相次いだ感がある²。また、一方で、我が国の中世土器研究を牽引する日本中世土器研究会が1995年以来の『概説 中世の土器・陶磁器』の新版を刊行し、本資料に関する記述が掲載されている。ところが、中世前期の資料か後期の資料かといった大枠と言っても過言ではない部分で誤解を与えかねない紹介がなされている。概説書という性格上、

今後の本資料への評価や調査・研究の進展に影響を与えかねないと危惧するところである。こうした混乱の要因は、後述する研究史上において、特に中世前期の土器研究にとっては欠かせない資料であるにも関わらず、一部の研究者の実見のみに留まっている状況があり、現状に至るまで当館における資料整理・報告等がなされていないことが最大の要因であることは否めない。

よって本稿は、令和4年度下半期に緊急的に実施した本資料の把握・整理内容を速報的に紹介し、多くの当該研究者へ実見を促すことを目的とする。(文責:下高)

1 研究史

樺番城窯は熊本県荒尾市樺に所在する窯跡で、遺物の特徴から古代須恵器を生産していた荒尾窯跡群の終末期である第8期に当たる9世紀、そして空白期間において13世紀において再び中世須恵器窯として操業していたことが想定されている(松本1980)。同窯跡の研究は、1954年に三島格によって発見され、須恵器片・瓦質土器片、連珠文の軒平瓦などを表採したことに始まる。1959年に三島が本窯跡を『熊本の歴史2』にて紹介したことで存在が公となった(三島1959)。

その後、1977年に亀井明徳が『世界陶磁全集3 日本中世』にて三島が収集した遺物を分析し、その流通の範囲が小規模であると想定し、亀山焼との類似性を指摘している(亀井1977)。

荻野繁春は樺番城窯製品を含めた有明海沿岸地域の出土遺物において、格子目タタキ痕と山形タタキ痕が製作技法上包括できる調整痕であると指摘し、特に高橋南貝塚における出土事例については常滑焼の大甕

と龍泉窯系青磁碗の共伴関係から年代を13世紀中葉から後半にあたりと年代策定を試みた。その上で樺番城窯を含めた有明海沿岸地域の在地産と見られる出土遺物について「肥後新型」と名称付けた(荻野1985・1993a・1993b)。

また、1994年においては、吉岡康暢が西日本における須恵器系窯跡の時期や器種組成および製作技法を分析し、特に甕製品の製作技術は西日本一帯で特徴的である一連叩打技法に納まると定め、器形や調整技法の類似点から、亀山窯を始め瀬戸内地域諸窯の工人が招致された可能性を想定している(吉岡1994、図1)。

美濃口雅朗は表採された樺番城窯の製品を中心に分析および実測と、先行研究で類似が指摘されてきた亀山窯の第1段階～第3段階に当たる各製品との比較を行い、加えて甕に限定した九州各地域における類例品の集成や実見分析を行った。それによると樺番城窯の主な器種組成は、甕が最も大きな比率を占め、次いで鉢、鍋、釜であるとし、器種の中で遺物数が最も多い甕製品を中心に分析を行った。結果、甕製品の口唇部から体部にかけての調整に類似性がみられることから、亀山窯との間に工人集団の交流を想定した。また、九州・沖縄で出土が報告されている類例品を分析したところ、樺番城窯の製品と見られる資料は熊本・福岡・佐賀・長崎の有明海沿岸地域に流通していたとした。しかし、鹿児島を始め一部の遺物の中には樺番城窯製品の特徴から異なる資料も確認されたと報告している(美濃口1997・2007)。なお製品の外見上の類似性は2007年に亀山焼について発表した伊藤晃も言及しているが、両窯間の工人集団の交流につ

いては言及されていない(伊藤2007)。

次に研究史の補足のため樺番城窯製品に直接的ではないが関連する研究を示す。

2013年に九州で3番目に発見された中世須恵器窯製品である大日焼が穴生古屋敷遺跡から出土しており樺番城窯製品との関係性が指摘されている。これに対する研究として梅崎恵司は、大日焼と亀山焼の外観の類似性や、大日焼に共伴する龍泉窯系青磁や常滑の甕などから12世紀末～13世紀後半という年代観を示している。同書内では白石純による理化学的な胎土分析を用いて西日本における中世須恵器窯製品151点を対象とした分析結果も示されており、それによると胎土内の成分に重複する領域はあるとしつつも大日焼と樺番城窯製品は区別可能であると見解を示している(梅崎2014)。

また、梅崎らが示した樺番城窯製品の年代観や他製品との比較分析は出合宏光も支持している。出合はこれに加えて亀山焼、樺番城窯製品、大日焼の3者に共通する製作技法に注目し、九州における古代須恵器の製作技法とは異なる技法がもたらされた可能性に言及した(出合2014)。

以上の様に、樺番城窯は現時点で九州内の数少ない中世窯の1つとされており、その製品の特徴から亀山焼との類似性が指摘され、技術的交流が両窯間にあった可能性が提唱されてきた。しかしながら両窯跡は地理的に離れており、かつ中間に位置する瀬戸内一帯の中世須恵器の生産地遺跡との明確な関係性は示されておらず、かつ樺番城窯側の資料的制約として窯体の構造が図化された記録が残っていないことから、製品間の比較分析による議論に留まっているのが現状と言える。また、九州内の甕・鉢製

品の出土資料について樺番城窯製品もしくはその類品として報告書内で記載されている遺物も確認されている。しかし現在、「これまで無批判に樺番城系とされてきたが、実際は調整や胎土などの特徴がやや異なるものも含まれている」(柴田ほか 2022)との指摘もある通り、窯跡の表採資料も含め再検討が求められている。(文責:鬼塚)

2 資料の把握・整理

(1) 現状把握 (写真1~4)

これまで主に亀井・吉岡・美濃口らによる実見・整理がなされてきているが(亀井 1977、吉岡 1994、美濃口 1997・2007)、最新の美濃口による整理・実測の痕跡がすべてのコンテナにおいて見受けられる状況である³。また、美濃口は、整理前は16箱で収蔵されていたと報告しているが(美濃口 1997)、令和4年度現在は31箱になっている。各コンテナは、一杯に小破片が収蔵されているものもあれば、残存状況がいい各器種の口縁部のみが少量収蔵されているコンテナもある。また、コンテナ一杯の小破片は、体部と底部などで分類して収蔵されているようにみえたが、複数部位や器種が混在していることが確認できたため、当時の整理は実測・拓本に耐えうる資料や調整痕に特殊性を見出した資料等の抽出を優先する分類(収蔵状況の改変)がなされたものと考えられる。さらに、同氏の報告中には、本窯跡の調査者である三島の調査日誌の内容が紹介されており、本資料は「焚き口付近とみられる露頭断面」・「灰原とみられる遺物集中部」・「周辺部」・「窯体断面」から発見・採集されたという記載がある。これらは調査時には、出土地点や層位などを意識した調査内容であっ

たと推測でき、遺構を意識した遺物の採り上げであった可能性がある。ところが、現状においては、これらの分類収蔵があった痕跡は全く見出せない状況であり、遺物採り上げの段階から出土地点の分類をせずに採集されたのか、調査時には出土地点で分類されていたものが過去の各氏による整理時に出土時情報が解体されたのかは、記録や報告が残されていないため不明と言わざるを得ない⁴。ただし、資料の中には軒平瓦を含む古代瓦が数点、窯体壁が付着した明らかに本資料群の主体を成すタタキ目痕とは異なる須恵器破片が数点混入していることから、これらが「窯体断面」から出土した資料である可能性が高い。これらの須恵器破片は9世紀代のものとされていることや、軒平瓦が窯体断面から発見されたことが調査日誌に記載されていることから(美濃口 1997)、古代窯跡群が存在していた地に中世段階で操業された等の場合に起こり得る古相遺物混入事象として矛盾はない。さらには、本資料のほとんどが小破片であり、それらの接合・復元は不可能である点から、ほとんどが「灰原とみられる遺物集中部」からの出土遺物の可能性を想定する。

(2) 整理方針

上記の現状把握を踏まえた結果、以下の整理方針を定めた。

- ①現状コンテナ収納状況を保持・記録
- ②実測・拓影による公表資料の同定作業・メモ写真撮影・公開しやすい適正な収蔵
- ③コンテナ単位で器種・胎土・調整・色調・焼成(瓦質・須恵質・土師質)の分類・破片点数カウント
- ④上記カウントデータを Excel 上で合算し

て資料上の分類把握

①は今後の整理作業に伴う収蔵状況を改変するとしても、これ以上の改変経緯が不明となることを避けるためである。②は基本的に美濃口 1997・2007 掲載資料となる。本資料の特別利用はこれまでの実績と今後の見通しから、当該図をもとに申請される傾向を見出せるため、当面の間はこれに対応しやすい状態を保持する（表 1、図 2）。③④が今回の作業の主体を成すものであり、これまで実施されていない作業となる。

(3) 全点把握（表 2、図 3）

コンテナ単位ですべての破片について、器種・胎土・調整・色調・焼成（瓦質・須恵質・土師質）の分類と破片点数のカウントを行い、Excel 上において資料的内容で合算して以下の通り把握した。器種は甕 75%・鉢 21%・鍋 3%・羽釜 1%の割合で確認できた。胎土は主に破片断面上で確認したが、異なる様相を見出せなかったためにすべて同等のものとする。調整痕についてもほぼ同類と考えられるが、甕破片数点でタタキ調整時のあて具痕が異なるものが混在している。これらは先述の通り、窯体壁が付着した古代の須恵器破片である。色調と焼成は、次の通り把握するようにした。まずは色調を淡茶・白灰・淡灰・灰白・灰・淡褐・暗灰・灰黒・淡黒の 9 種に分類した。その上で、焼き締め等の硬度を勘案して、淡茶を土師質系、白灰・淡灰・灰白・灰を須恵質系、淡褐・暗灰・灰黒・淡黒を瓦質系と把握するようにした。結果、全体的には土師質系統が 7%、須恵質系統が 65%、瓦質系統が 28%で、須恵質系統が圧倒的に多いことが数値

的に把握することができた。このことは、器種ごとでも同様の傾向となる。先述の通り、本資料の大半が灰原からの出土の可能性があり、いわゆる操業期間内での堆積ないし廃業時段階の廃棄物であるため、本窯での完成品の割合をどこまで正しく反映しているのかは、少し冷静な判断が必要かもしれない。残存する考古資料からの把握は以上の通りとなる。（文責：下高）

おわりにー今後の課題と展望

本稿では令和 4 年度作業の概要を報告した。今回はあくまでも現在の収蔵状況を維持しつつ、本資料の全体像を把握しようとするものである。遺物の観察という点では、まだまだこれから実施しなければならない作業がある。今後、真っ先にすべき事としては、各器種・部位での製作工程を考慮した調整痕の詳細把握が必要と考えている。本資料は色調分類を基礎とした焼成具合を土師質・須恵質・瓦質の三系統に分類でき、これらが窯構造やその時々焼成条件等に左右された結果の偶発的生成であったとしても、細かい調整痕の差異の有無を見出すことにより、本窯製品がどの系統の技術から生成されたものなのか、あるいはどの技術を目指していたのかなどを把握できるものと考ええる。こうした丁寧な作業を踏まえて、樺番城窯製品を把握した上での他製品との比較や類例などの抽出・再検討が必要である。

膨大な量あるいは一定の数量を伴う資料を分析・考察・解釈する際は、まずは全体像の把握をした上で詳細な部分へ視点を向けないと、研究手法や方法論がいわゆる考古学的であったとしても、間違った資料解釈になりかねない。一方で、当該資料は考古資

料である前に、公的な博物館資料、さらには個人からの預かり品となる寄託品である。資料の取扱いの観点でそれなりの適正な状態を保持しておくべきことは言うまでもない。引き続き、こうした観点で資料の保管と整理を実施していきたい。（文責：下高）

《謝辞》

本資料の把握及び本稿執筆中に、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターの川口雅之氏、並びに井上喜久男氏にそれぞれ本資料を実見していただく機会があり、今後の課題や展望に関して有益な情報をいただきました。記して感謝致します。

参考文献

伊藤晃 2007「亀山窯」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 補遺編』、全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会 p.105-116
梅崎恵司 2014「麻生氏と中世須恵器“大日焼”」『研究紀要』第28号、北九州市芸術文化振興財団 p.11-26
岡山県古代吉備文化財センター1988『山陽自動車道建設に伴う発掘調査3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書69
荻野繁春 1985「西日本における中世須恵器系陶器

の生産資料と編年」『福井考古学会会誌』3号、福井考古学会 p.1-83

荻野繁春 1993a「中世西日本における国産貯蔵器の分布」『福井考古学会会誌』11号、福井考古学会 p.45-95

荻野繁春 1993b「西日本における貯蔵容器の生産」『考古学雑誌』第78巻3号日本考古学会 p.31-73

亀井明德 1977「九州」『世界陶磁全集3 日本中世』、小学館 p.260-265

北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2013『穴生古屋敷遺跡第3次調査』北九州市埋蔵文化財調査報告書502

柴田亮ほか 2022「第11章 九州」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 p.139-154

出合宏光 2014「九州の中世須恵器窯」『肥後考古』19巻、肥後考古学会 p.142-149

松本健郎 1980「樺番城窯跡」『生産遺跡基本調査報告書2』、熊本県文化財調査報告第48集 p.127-159

三島格 1959「須恵器の窯あと」『熊本の歴史2』、熊本日日新聞社 熊本 p44

美濃口雅朗 1997「樺番城窯跡の中世須恵器(1)」『肥後考古』10号 肥後考古学会 p.142-149

美濃口雅朗 2007「樺番城窯（熊本県）」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 補遺編』全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会 p.143-162

吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

¹ 鹿児島大学大学院人文社会科学部研究科（人間環境文化論専攻）修士1回生（令和4年度時点）。前年度から本資料を特別利用しており、令和4年度の特別利用申請者の一人である。

² 当館館報の特別利用状況等を参照されたい。なお、筆者は令和4年度に当館の考古担当学芸員として着任しているため、それ以前の本資料に関する特別利用内容の詳細までは把握できていない。

³ 美濃口 1997・2007 掲載遺物の実測番号がテープで遺物に直接貼られ、遺物に実測時の測点把握のためのチョーク痕が複数確認できる。また、同一

字体によるメモ書き等も散見されるため、これらは美濃口の整理時の痕跡と考えて差し支えない。

⁴ 今回の作業にあたっては、現状における本資料の収蔵状況を概観した上で、考古資料・博物館資料、さらには寄託品という資料の取扱い上の観点で疑念を抱かざるを得ない状態であったために、過去の整理関係者への聞き取り等は敢えて実施せず、ありのままの状況を本稿にて報告するものである。なお、紙面の都合上、すべてを報告できないため、現状の写真記録などは当館にて保管している。

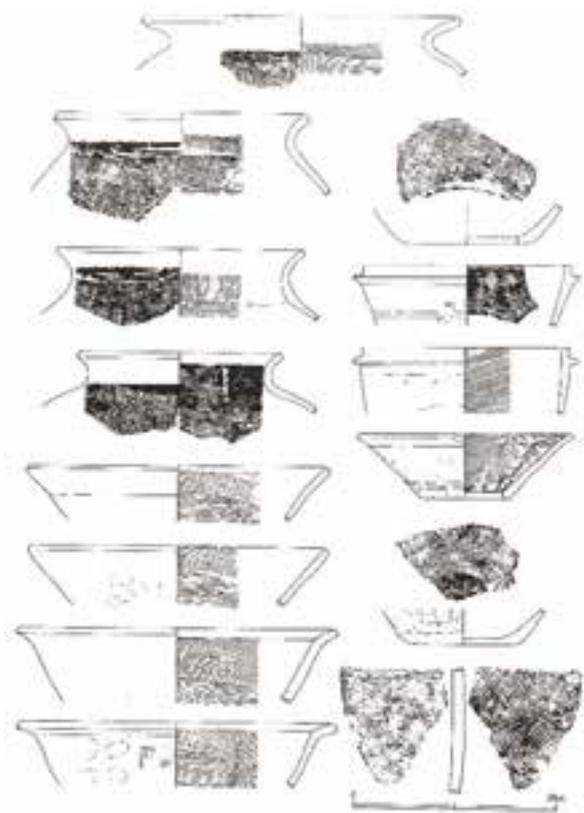


図1 樺番城窯跡出土品実測図(吉岡 1994)



写真1 コンテナ別収蔵状況例①(令和4年度現在)



写真2 コンテナ別収蔵状況例②(令和4年度現在)



写真3 令和4年度 内容把握前状況



写真4 令和4年度 内容把握後状況

赤色=美濃口 1997 掲載、黄色=美濃口 2007 掲載等

表1 美濃口 1997 掲載遺物報告番号・収蔵遺物実測番号対照表

美濃口雅朗 1997掲載図	報告 番号	実測 番号									
図6	1	32	図8	45	64	図10	80	159	図12	114	102
	2	81		46	84		81	170		115	107
	3	82		47	87		82	154		116	115
	4	54		48	89		83	158		117	123
	5	60		49	94		84	144		118	124
	6	55		50	90		85	157		119	47
	7	36		51	92		86	140		120	114
	8	43		52	93		87	151		121	117
	9	41		53	86		88	149		122	105
	10	69		54	91		89	45		123	106
	11	37		55	134		90	110		124	120
	12	42		56	145		91	112		125	118
	13	40		57	138		92	136		126	113
	14	38		58	163		93	129		127	96
図7	15	62	図9	59	165	図11	94	111	図13	128	97
	16	67		60	164		95	130		129	103
	17	79		61	161		96	104		130	99
	18	71		62	162		97	116		131	109
	19	34		63	166		98	126		132	108
	20	63		64	167		99	131		133	160
	21	57		65	168		100	48		134	174
	22	75		66	169		101	119		135	171
	23	70		67	141		102	125		136	172
	24	33		68	156		103	127		137	173
	25	35		69	143		104	128			
	26	65		70	137		105	132			
	27	83		71	146		106	49			
	28	44		72	147		107	122			
	29	56		73	150		108	100			
	30	85		74	152		109	98			
	31	95		75	155		110	135			
	32	58		76	139		111	121			
	33	59		77	142		112	133			
	34	61		78	148		113	101			
	35	72		79	153						
	36	66									
37	74										
38	68										
39	77										
40	73										
41	76										
42	78										
43	80										
44	39										



図2 美濃口 2007 掲載遺物報告番号・収蔵遺物実測番号付与図（美濃口 2007 掲載図に追記）

表 2-1 樺番城窯跡出土品 全点カウント一覧

器種	部位	コンテナNo.	点数	土師質系					須恵質系				瓦質系			
				【淡茶】 [10YR6/2 (灰黄褐)]	【白灰】 [7.5Y8/1 (灰白)]	【淡灰】 [5Y7/1(灰 白)]	【灰白】 [2.5Y7/1 (灰白)]	【灰】 [2.5Y6/1 (黄灰)]	【淡褐】 [10YR6/1 (褐灰)]	【暗灰】 [2.5Y5/1 (黄灰)]	【灰黒】 [10YR5/1 (褐灰)]	【淡黒】 [10YR4/1 (褐灰)]				
甕	口縁部	2/31	20	2	3	5	—	3	—	—	3	4				
		5/31	2	—	—	—	1	—	—	—	1	—				
		9/31袋1	1				1									
		9/31袋1中の袋③	1								1					
		9/31袋1中の袋⑤	1					1								
		9/31袋2	4			2		1				1				
		15/31袋1	7	1		2		1		1	2					
		16/31袋1	8	1	1		1	1			3	1				
		22/31	6	—	1	1	—	1	—	—	1	1				
		28/31	10	—	—	3	4	2	—	—	—	1				
		30/31	20	—	2	5	—	4	—	—	5	4				
		色調別合計	80	4	7	18	5	16	0	1	16	12				
系統別合計		土師質系 4点	須恵質系 46点					瓦質系 29点								
甕	体部	2/31	6	—	1	2	—	1	—	1	—	1				
		4/31	15	—	3	4	1	2	—	1	4	—				
		7/31	137	12	29	11	12	28		22	16	7				
		9/31袋1中の袋①	3	2				1								
		9/31袋1中の袋④	1					1								
		10/31	264	17	45	46	56	70	—	—	30	—				
		13/31	88	8	26	12	4	12	1		20	5				
		15/31	103	3	25	11	10	21		13	11	9				
		15/31袋1	7	1				2		3		1				
		16/31	166	18	36	15	23	29		17	9	19				
		16/31袋1	20		10			6		1	1	2				
		16/31袋2	45	9	7	7	3	8		2	7	2				
		18/31	3	—	—	1	2	—	—	—	—	—				
		25/31	9	1	—	3	—	2	—	—	2	2				
		26/31	86	2	19	7	10	19	1	9	13	6				
色調別合計	953	73	201	119	121	202	2	69	113	54						
系統別合計		土師質系 73点	須恵質系 643点					瓦質系 238点								
甕	底部	5/31	2	—	—	—	1	—	—	—	1					
		14/31	14	1	2	2	1	1	—	—	4	3				
		18/31	12	1	1	1	1	1	—	—	4	3				
		21/31	16	1	4	4	—	3	—	—	4	—				
		24/31	1	—	—	—	—	1	—	—	—	—				
		25/31	5	—	2	1	—	1	—	—	1	—				
色調別合計	50	3	9	8	2	8	0	0	13	7						
系統別合計		土師質系 3点	須恵質系 27点					瓦質系 20点								
羽釜	口縁部	16/31袋1	1								1					
		20/31	37	—	12	5	5	3	—	—	7	5				
		色調別合計	37	—	12	5	5	3	—	—	7	6				
系統別合計		土師質系 0点	須恵質系 25点					瓦質系 13点								
鍋	口縁部	9/31袋2	1					1								
		16/31袋1	2			1					1					
		16/31袋2	1								1					
		29/31	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—				
		29/31袋	7	1	—	1	3	—	1	—	1	—				
		色調別合計	12	1	—	2	3	1	1	—	2	2				
系統別合計		土師質系 1点	須恵質系 6点					瓦質系 5点								

※器種・部位不明破片並びに実測・拓本等不可能小片がコンテナNo.2・5・9・11・14・15・16・26 にあり。これらはカウント対象外

※コンテナNo.31 は樺番城窯跡以外(「野原」)のためノーカウント

※古代須恵器(破片数 40)がそれぞれコンテナNo.9・16・17・26 にあり。破片数は本表外

※古代瓦(平 13、軒平 1)がそれぞれコンテナNo.16・26・27 にあり。破片数は本表外

表 2-2 樺番城窯跡出土品 全点カウント一覧

器種	部位	コンテナNo.	点数	土師質系					須恵質系				瓦質系			
				【淡茶】 [10YR6/2 (灰黄褐)]	【白灰】 [7.5Y8/1 (灰白)]	【淡灰】 [5Y7/1(灰 白)]	【灰白】 [2.5Y7/1 (灰白)]	【灰】 [2.5Y6/1 (黄灰)]	【淡褐】 [10YR6/1 (褐灰)]	【暗灰】 [2.5Y5/1 (黄灰)]	【灰黒】 [10YR5/1 (褐灰)]	【淡黒】 [10YR4/1 (褐灰)]				
鉢	口縁部	3/31	22	1	3	—	6	3	—	—	7	2				
		5/31	16	3	6	2	—	3	—	—	2	—				
		6/31袋	9	—	—	5	2	1	—	—	1	—				
		6/31袋(こね鉢?)	1	—	—	—	—	1	—	—	—	—				
		6/31袋(ラベルあり)	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—				
		6/31袋(ラベルあり)	2	—	1	—	1	—	—	—	—	—				
		6/31袋(黄1~11)	11	—	3	4	—	3	—	—	1	—				
		6/31袋(29~33)	5	—	2	—	1	1	—	—	1	—				
		6/31袋(黄34・35)	3	—	1	1	—	—	—	—	—	1				
		6/31袋(黄36・37)	2	1	—	—	1	—	—	—	—	—				
		6/31袋(黄38~45)	8	—	—	4	2	—	—	—	2	—				
		6/31袋中袋	12	—	—	2	4	—	—	—	6	—				
		6/31袋中袋	5	—	—	1	1	—	—	2	1	—				
		6/31袋中袋	3	—	1	2	—	—	—	—	—	—				
		6/31袋中袋(黄1~11)	9	—	1	5	1	—	—	1	1	—				
		6/31袋中袋(黄12~19)	8	—	2	3	2	—	—	—	1	—				
		6/31袋中袋(29~33)	3	—	2	1	—	—	—	—	—	—				
		9/31袋1中の袋⑤	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—				
		12/31	60	7	5	19	11	4	—	—	9	5				
		16/31	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—				
		16/31袋2	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—				
		19/31袋	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—				
		23/31	19	—	1	4	—	2	—	1	5	6				
		24/31	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—				
		29/31	13	3	—	2	1	2	—	—	3	2				
		29/31箱	4	—	—	2	—	—	—	—	2	—				
色調別合計	221	15	29	57	33	20	0	4	47	16						
系統別合計		土師質系 15点	須恵質系 139点				瓦質系 67点									
体部	3/31	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—					
	14/31	18	—	3	5	4	2	—	—	1	3					
	29/31箱	2	—	—	—	1	—	1	—	—	—					
	色調別合計	21	0	3	6	5	2	1	0	1	3					
系統別合計		土師質系 0点	須恵質系 16点				瓦質系 5点									
底部	2/31	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—					
	19/31	37	9	6	4	14	4	—	—	—	—					
	19/31袋	5	—	1	2	1	—	1	—	—	—					
	24/31	19	1	3	6	3	1	—	1	4	—					
	29/31箱	2	—	1	—	1	—	—	—	—	—					
色調別合計	64	10	12	12	19	5	1	1	4	0						
系統別合計		土師質系 10点	須恵質系 48点				瓦質系 6点									

※器種・部位不明破片並びに実測・拓本等不可能小片がコンテナNo.2・5・9・11・14・15・16・26 にあり。これらはカウント対象外

※コンテナNo.31 は樺番城窯跡以外(「野原」)のためノーカウント

※古代須恵器(破片数 40)がそれぞれコンテナNo.9・16・17・26 にあり。破片数は本表外

※古代瓦(平 13、軒平 1)がそれぞれコンテナNo.16・26・27 にあり。破片数は本表外

图3 樺番城窯跡出土品 各割合図

